ソフトバンクグループの特許二層構造戦略

ソフトバンクグループは2023年秋以降、生成AI領域において国内・世界首位となる爆発的な大量特許出願を展開。しかし実態は、
持株会社（SBG）による「VC型・防衛的大量出願」と、事業子会社（Arm、SBKK等）による「実効的な中核権利保護」という明確な二層構造で機能している。

【第1層】SBG（持株会社）

SBG（持株会社）：量によるAI応用領域の先占戦略

STATISTIC: 2026年の国内出願公開数は22,855件で首位を独走
トヨタの4倍以上の規模。WIPO集計でも生成AI特許ファミリー数世界1位。

KEY FINDING: 審査係属中96.1%・取得率約0.5%の「VC型戦略」
早期権利化ではなく、大量公開による先行技術化と事後選別を最優先。

持株会社と事業子会社の役割分担と知財規模の対比

法人名（役割）	重点領域	主な知財規模（2026年時点）
SBG（持株会社）	生成AI応用・ビジネスモデル	公開22,855件（国内1位）/ 登録356件
Arm Holdings（半導体IP）	CPU/GPUアーキテクチャ・AI	世界登録特許 約8,000件
ソフトバンク/SBKK（通信）	通信インフラ・HAPS・AI-RAN	保有約2,200件 / HAPS関連約870件

【第2層】事業子会社

事業子会社：質と国際権利化による技術保護

KEY FINDING: Arm & SBKKが担うグローバル中核技術の防衛

Arm
半導体IPで
約8,600件

×

SBKK
HAPS関連で
約670件の権利を保有

STATISTIC: LINEヤフー・PayPayによる実サービスへの権利網



LINEヤフー
LINEヤフーは4,803件を保有、PayPayは
高水準の時許登録率 (2026年160件) を推移。

Gemini Notebook